大地に刻む農の文化

301 | 2018.4 April

土地改良

私からみた土地改良

塩飽二郎元農林水産審議官に聞く

土地改良、日本の農業、農村の発展に向けて宮崎雅夫氏に抱負を伺う

昨年12月末に農村振興局地域整備課長を最後に農林水産省を退職して、現在、全国水土里ネット会長会議顧問で政治の道を志された宮崎雅夫氏に土地改良、日本の農業、農村の発展に向けてその抱負を伺った。

兵庫県、六甲山の麓の農村育ち

――宮崎さんは兵庫県の御出身と伺いましたが、ご実家は農家ですか。

宮崎　はい、兵庫県神戸市の農家の出身です。神戸とお聞きになると港町神戸、都会といったイメージをお持ちなる方が多いと思いますが、私は六甲山の北側にある山田町というところの生まれで、山と田んぼに囲まれた農村で育ち、祖父母とも一緒に暮らしていました。

子供の頃の思いでは稲刈りや牛のエサやり

――農家の出身と言うことですが、子どもの頃はどんな思い出がありますか。

宮崎　私の実家は主に米を作り、田植えは集落のみんなに手伝ってもらったり、母が手伝いに行ったりしていました。稲刈りは私も子供の頃から鎌を持って手伝っていました。

母の実家も同じ神戸ですが、農家で米以外に乳牛を二〇～三〇頭ぐらい飼っていましたので、夏休みには母の実家に私一人だけ残り、朝早くから起きて牛にエサをやったり乳搾りを手伝ったりした、楽しい思い出もあります。

農村での暮らしが自身の基礎となっている

――大学では農学部を選んでいますが、実家が農家であったことに関係があるんですか。

宮崎　そうですね、中学、高校と地元の神戸の学校に通いました。高校時代は、少し勉強はおろそかになりましたが、硬式テニスをやっておりテニス部のキャプテンを務めていました。大学も地元の神戸大学農学部農業工学科に進みましたが、子供の頃から農業の手伝いをしたことが、私の今の仕事と言いますか、私自身の基礎になっているような気がしています。

新潟県及び山形県での現場、ベトナム及びカンボジアでの経済協力など豊富な経験と進藤先生の後任として熊本県で活躍

――大学を卒業して、農水省に就職されましたが、どのようなご経験をされましたか。

宮崎　昭和六十二年三月に神戸大学農学部農業工学科を卒業し、同年四月に農林水産省に入省しまして、いろいろな職場で働かせていただきました。

昭和六十三年四月、最初の現場である新潟県の三条市にある北陸農政局下田開拓建設事業所では、農地開発と区画整理を担当しました。また、山形県庄内町の東北農政局最上川下流農業水利事業所では、工事課長を経験しました。

本省では、係長、三ポストの課長補佐、海外土地改良技術室長、地域整備課長を務めさせていただきました。

海外では、ベトナムの日本大使館に三年、カンボジアでJICAの専門家として三年勤め、農業だけではなく、経済協力の関係などの仕事もさせていただきました。

熊本県では、進藤先生の後任として三年間お世話になりました。

地元の声を国政に届ける役割を担いたいとの強い思いから国政を志す

――政治の道を目指そうとしたきっかけについて

伺いたいと思います。

宮崎　私が熊本県庁の在任中、平成二十二年度農業農村整備関係予算が大幅に削減になりまして、県営事業の新規着工を凍結せざるを得ない状況になりました。新規着工までの地元関係者の皆様の気持ちを考えると、これが政治なのかと、非常に悔しい想いをした記憶があります。一方で、予算が減った分、県としても何とかしなければならないと、県費を活用し県の単独事業をある程度の規模で創ったりしましたが、それを応援していただいたのは県内の政治であったわけです。

その時に改めて、いや初めてと言った方が良いかもしれませんが、政治の力を認識いたしました。

また、本省の室長・課長の時には、地元の皆様から政策提案なり土地改良に対する思いをお聞きし、農水省の職員として出来るだけそれに応えていかなければならい、そのような気持ちを持っていました。

入省以来、皆様方に育てていただいたと思っています。恩返しをしなくては、今がその時期なのだと思いましたし、進藤先生が地元の声を国政の場にしっかり届けておられますが、もう一人いればそれらの声をもっと届けることができるのではないか、そして、予算についても今後さらに安定的に増加させていくことができるのではないか、そのような思いが政治の道を志すきっかけとなりました。

農業農村整備の予算規模は道半ば、農地、農業用水の継続、土地改良区の発展

――土地改良、日本の農業、農村の発展に向けてどのような課題があると思われていますか。

宮崎　一つ目には、農業農村整備関係の予算の確保は非常に重要な課題だと思います。闘う土地改良の旗印の下、土地改良関係者の皆様の気持ちのこもった活動成果として三十年度予算は非常に大きな伸びとなりましたが、まだまだここがゴールではないと思っています。皆様と一緒に闘っていきたいと、強く思っています。

二つ目は農地、農業用水について、今だけではなくそれを未来につなげていく必要があるのではないか、また、それぞれの地域によって歴史があります。皆様で守ってきたものや今つくっているものをしっかりした形で未来に繋げていくことが、我々の責務ではないかと思っています。

三つ目は土地改良区の強化、発展だと思っています。海外の土地改良関係者からは、日本の近代的な施設の素晴らしさはもちろん、それ以上に、土地改良区は素晴らしいと称賛されています。受益農家が組織して維持管理や水配分をしっかりやっている、それも自分たちが賦課金を集めてやっていることに驚いています。私も、土地改良区は日本が誇る組織であると思っています。

しかし、現在、農業情勢が変化する中で、土地改良区の在り方も曲がり角に差しかかりつつあるのではないかと感じています。土地改良区の体制強化は今後の大きな課題だと思っています。

土地改良、日本の農業、農村の発展のために進藤先生と車の両輪という役割を担いたい

――お話しいただいた課題の改善に向けてどのように活動をしようと思っていますか。

宮崎　土地改良は現場第一、現場主義だと思っていますので、全国を廻らさせていただき、お話を伺うことがまず一番だと肝に銘じております。このため、昨年末に農水省を退職しました。一月から全国を廻らせていただいておりますが、色々と伺った話を土台に、様々な取り組みにチャレンジしていきたいと思っています。

土地改良、日本の農業、農村の発展のために、進藤先生と車の両輪という役割を是非とも、私、宮崎雅夫に担わせていただきたいと考えていますので、よろしくお願い申し上げます。

――今日はお話しを伺って宮崎さんの土地改良、日本の農業、農村の発展に向けての強い思いがよく分かりました。是非ともその思いを実現していただくよう願っております。本日は、ありがとうございました。

宮崎　こちらこそ、有難うございました。

宮崎　雅夫［みやざき　まさお］

〈プロフィール〉

- 昭和38年12月3日生
- 兵庫県神戸市　出身
- 昭和57年3月　兵庫県立兵庫高等学校卒業
- 昭和62年3月　神戸大学農学部農業工学科卒業
- 昭和62年4月　農林水産省入省
- 北陸農政局　下田開拓建設事業所（新潟県下田村（現三条市））
- 構造改善局　事業計画課係長
- 在ベトナム日本大使館　二等書記官
- 東北農政局　最上川下流農業水利事業所　課長（山形県余目町（現庄内町））
- カンボジア王国水資源気象省（JICA専門家）
- 農村振興局　農村政策課　事業計画課　設計課　各課長補佐
- 熊本県農林水産部　農村計画・技術管理課長
- ㈳地域環境資源センター集落排水部長
- 農村振興局　海外土地改良技術室長
- 農村振興局　地域整備課長
- 平成29年12月　農林水産省　退職

進藤金日子参議院議員レポート

現場第一主義で頑張っています

現場で熱く語る進藤金日子議員（中央）と足立敏之議員（左）

進藤金日子は現場第一主義で全国を駆け巡っています。今回は、二月二十五日に沖縄県石垣島の農業かんがい施設、底原ダムを視察した後、二月二十六日には自民党参議院の平成二十八年同期当選メンバーで構成する「二八会」で、群馬県の八ッ場ダムを視察しました。参加者は足立敏之、藤木眞也、宮島喜文、自見はなこ、今井絵理子、小野田紀美の各議員そして進藤金日子の総勢七名です。

八ッ場ダムは、群馬県吾妻郡長野原町（利根川水系吾妻川）において、洪水調節、流水の正常な機能の維持、水道及び工業用水の新たな確保並びに発電を目的とする多目的ダムで、現在建設中です。完了予定年度は平成三十一年度、建設に要する費用は約五、三二〇億円を予定しています。

現在、ダム高一一六mのうち六三mの高さまでコンクリート打設が進み、予定の約半分まで進捗しており、平成三十一年度完成を目指して急ピッチで工事が進められています。

ダム建設に至る歴史、ダム中止宣言による影響、再開後の官民連携した猛奮闘など公共事業と政治の問題を現場で改めて深く考えさせられました。

コンクリートと人を区別して双方を対立概念で標語化することは厳に慎まなければなりません。コンクリートと人が相協力して、自然の猛威から

進藤金日子議員は後列の左から三人目

人々の安全を守り、安心な生活、更には便利な生活を支えています。

私も九州農政局上場農業水利事業所（佐賀県唐津市）で赤坂ダム建設に、北陸農政局日野川用水農業水利事業所（福井県武生市）で桝谷ダム建設に携わった経験がありますが、ダムは地域における重要なかんがい施設として活躍しています。

今回の視察を先導、支援いただいた足立敏之参議院議員に感謝です。国土交通省関東地方整備局、ダム建設共同企業体（清水・鉄建・IHI）をはじめとした関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

やはり現場が原点、多くの方々に八ッ場ダムの現場をご覧いただきたいと思います。温泉や道の駅の名物ダムカレーをはじめ多くの楽しみもあるダム周辺です。八ッ場ダムが下流の多くの人々の生命、財産を守り、また立地地域の地域振興に大きな力を発揮することを期待して、現場を後にしました。

さて、このたび宮崎雅夫さんが農林水産省を退職して、全国水土里ネット会長会議顧問に就任し、全国の土地改良区を廻っております。

「強い農林水産業」と「美しく活力ある農山漁村」を創るためには、宮崎雅夫さんの経験豊富な知見が必要です。

日本の未来への礎を築くため奮闘されている宮崎さんと共に活動を展開して参ります。

八ッ場ダム堤体部のコンクリート打設工事

道の駅の名物　ダムカレー